

武蔵野日曜集会

イエスの糧

――ヨハネ伝第6章1～15節――

1967年10月15日（武蔵野）

小池辰雄

神の中にまず魂が休らう。ここに一人の童子あり。五つのパンと二つの魚。エホバはわが牧者われ乏しきことなし。天を仰ぎて祝し。キリストはパンにおいて己を裂いた。霊現の世界に魂が入ったら。現象体においてその根元なるものを見る。神さまの不思議な導き。霊子とでも言いたいような生命の世界。

【ヨハネ6・1～15】

1 この後イエス、ガリラヤの海、即ちテベリヤの海の彼方にゆき給えば、
2 大なる群衆これに従う、これは病みたる者に行いたまえる徴を見し故なり。
3 イエス、山に登りて、弟子たちと共にそこに座し給う。4 時はユダヤ人の祭なる過越に近し。5 イエス眼をあげて大なる群衆のきたるを見て。ピリポに言い給う『われら何処よりパンを買いて、此の人々に食わすべきか』6 かく言い給うは。ピリポを試むるためにて、自ら為さんとする事を知り給うなり。7 ピリポ答えて言う『二百デナリのパンありとも、人々すこしずつ受くるになお足らじ』
8 弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言う『ここに一人の童子あり、大麦のパン五つと小さき肴二つとをもてり、然れど此の多くの人には何にか為らん』10 イエス言いたもう『人々を坐せしめよ』その処に多くの草ありて人々坐せしが、その数おおよそ五千人なりき。11 ここにイエス、パンを取りて謝し、坐したる人々に分かちあたえ、また肴をも然なして、その欲するほど与え給う。12 人々の飽きたるのち弟子たちに言いたもう『廃るものなきように擘きたる余をあつめよ』13 すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの擘きたるを食いしもの余、十二の筐に満ちたり。14 人々その為し給いし徴を見ていう『実にこれは世に来るべき預言者なり』
15 イエス彼らが来りて己をとらえ、王となさんとするを知り、復ひとりにて山に遁れたもう。

【マタイ14・13～21】

13 イエス之を聞きて人を避け、其処より舟にのりて寂しき処に往き給いしを、



群衆ききて町々より徒歩にて従いゆく。¹⁴ イエス出でて大なる群衆を見、これを憫みて、その病める者を医し給えり。¹⁵ 夕べになりたれば、弟子たち御許に來りて言う『ここは寂しき処、はや時も晩し、群衆を去らしめ、村々に往きて、己が為に食物を買わせ給え』¹⁶ イエス言い給う『かれら往くに及ばず、汝ら之に食物を与えよ』¹⁷ 弟子たち言う『われらが此処にもてるは唯五つのパンと二つの魚とのみ』¹⁸ イエス言い給う『それを我に持ちきたれ』¹⁹ 斯て群衆に命じて、草の上に坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンを裂きて、弟子たちに与え給えば、弟子たち之を群衆に与う。²⁰ 凡ての人、食いて飽く、裂きたる余を集めしに十二の筐に満ちたり。²¹ 食いし者は、女と子供とを除きて凡そ五千人なりき。

【マルコ6・30～44】

³⁰ 使徒たちイエスの許に集まりて、その為ししこと、教えし事をことごとく告ぐ。³¹ イエス言い給う『なんじら人を避け、寂しき処に、いぎ來りて暫し息え』これは往来の人おおくして、食する暇だになかりし故なり。³² かくて人を避けて、舟にて寂しき処にゆく。³³ その往くを見て、多くの人それと知り、その処を指して、町々より徒歩にてともに走り、彼等よりも先に往けり。³⁴ イエス出でて、大なる群衆を見、その牧う者なき羊の如くなるをいたく憫みて、多くの事を教えはじめ給う。³⁵ 時すでに晩くなりたれば、弟子たち御許に來りて言う『ここは寂しき処、はや時も晩し。³⁶ 人々を去らしめ、周囲の里また村に往きて、己がために食物を買わせ給え』³⁷ 答えて言い給う『なんじら食物を与えよ』弟子たち言う『われら往きて二百デナリのパンを買い、これに与えて食わすべきか』³⁸ イエス言い給う『パン幾つあるか、往きて見よ』彼ら見ていう『五つ、また魚二つあり』³⁹ イエス凡ての人の組々となりて、青草の上に坐すことを命じ給えば、⁴⁰ 或は百人、あるいは五十人、畝のごとく列びて坐す。⁴¹ かくてイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝しパンをさき、弟子たちに付して人々の前に置かしめ、二つの魚をも人毎に分け給う。⁴² 凡ての人、食らいて飽きたれば、⁴³ パンの余り、魚の残りを集めしに、十二の筐に満ちたり。⁴⁴ パンを食らいたる男は五千人なりき。

【ルカ9・10～17】

¹⁰ 使徒たち歸りきて、その為しし事を具にイエスに告ぐ。イエス彼らを携えて窃にベツサイダという町に退きたもう。¹¹ 然れど群衆これを知りて従い來りたれば、彼らを接けて、神の国の事を語り、かつ治療を要する人々を医し



たもう。¹²日傾きたれば、十二弟子きたりて言う『群衆を去らしめ、周囲の村また里にゆき、宿をとりて、食物を求めさせ給え。我らは斯かる寂しき処に居るなり』¹³イエス言い給う『なんじら食物を与えよ』弟子たち言う『我らに、ただ五つのパンと二つの魚とあるのみ、この多くの人のために、往きて買わねば他に食物なし』¹⁴男およそ五千人いたればなり。イエス弟子たちに言いたもう『人々を組にして五十人づつ坐せしめよ』¹⁵彼等その如くにして、人々をみな坐せしむ。¹⁶斯くてイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、裂きて弟子たちに付し、群衆のまえに置かしめ給う。¹⁷彼らは食いて皆飽く。裂きたる余りを集めしに十二筐ほどありき。

●神の中にまず魂が休らう

「この後イエス、ガリラヤの海、即ちテベリヤの海の彼方にゆき給えば、

「この後」と言いましたも、これはガリラヤの出来事ですから、5章から6章に続くのは無理だと、5章はエルサレムに行つてしまつていたので、エルサレムからいきなりこのガリラヤにすぐ飛ぶのはちよつとおかしいと。むしろ4章から6章に行つた方がつながりがよくて、5章は7章の方にくんだというようなことを言いますが、あるいはそうかも知れません。まあそういう学問的なことはやめましょう。

「ガリラヤの海」も「テベリヤの海」も同じことです。大体、ガリラヤ湖の東側に居られたわけです。「彼方」というのは東岸のことです。

²大なる群衆これに従う、これは病みたる者に行いたまえる徴を見し故なり。

イエスが病人を癒された。そのことは5章にも出ている。もうあまねく、キリストがいかにか病を癒したり、悪鬼を追ひ出したりする力を持った人であるかということとは伝え渡つてしまつてゐる。だから、群衆がついて来る。今でも新興宗教あたりで何か少しそういった力が現われてきますと、ワツシヨイワツシヨイとついて来るのと同じようなわけです。

³イエス、山に登りて、弟子たちと共にそこに座し給う。⁴時はユダヤ人の祭なる過越に近し。⁵イエス眼をあげて大なる群衆のきたるを見てピリポに言い給う『われら何処よりパンを買いて、此の人々に食わすべきか』

イエスが「山に登る」という。大体、山に登られるのは、特に祈るために行かれるわけです。「向こうからたくさんやつて来るが、もうだいたい時刻が過ぎてゐるので、どこかでパンを買いに行つて人々に食わせよう。どうしたらいいものだろうか」

なんて、イエスのこの問いは「見かけ上の問い」であつて、本気になつてイエスが訊いてゐるわけではない。これから展開してくるところの記事は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書に全部出ているので、四福音書に全部出ている記事というのはそうない。それだけ、この記事が非常に重要な記事であるということが分かるわけです。



マタイ伝でいうと14章13節から21節まで、マルコ伝は6章30節から44節、ルカ伝は9章10節から17節です。マルコ伝をちよつと開くと、6章30節に、

「³⁰使徒たちイエスの許に集まりて、その為ししこと、教えし事をことごとく告ぐ。

というのは、あの洗礼のヨハネが処刑されたあとで、十二使徒を伝道に遣わしたことがあります。それからその報告を聞いたことがそのマルコ伝に出ているわけです。

³¹イエス言い給う『なんじら人を避け、寂しき処に、いざ来りて暫し^{しば}息え^{いこ}』

これは往来の人おおくして、食する暇だになかりし故なり。」(マルコ6・30)

31)

マルコ伝では、どうしてそんな処へ行かれたかというところ、寂しい処に行つて少し休んだという。「食する暇もない」というのは、もちろんそこで食べようというわけではないので、まあ少し休もうとした。

キリストが休むのは、ただボヤツと休むのではなくて、必ず祈りの世界に入る。我々も、休らうときには、ただ肉体を休らうのでなくて、神の中にまず魂が休らう。だから、申し上げているとおり、祈りというのは何かを求めることではなくて、自分自身を委ねることが祈りである。神の中に自分自身を委ねることが祈りであります。私は日曜の朝は特に祈りを深くいたします。そうすると、朝食はあまりお腹に入らない。その中に入ると、何か知らんけれども、力に満ちてくるわけです。これが私たちの休らいというものです。

●ここに一人の童子あり

それで、大勢やつて来たから、これにどうやつて食わせようかと。

⁶かく言い給うはピリポを試むるために、自ら^な為さんとする事を知り給うなり。

と、ヨハネ伝ではちゃんと、キリストがなぜそんなことを訊かれたかということの中身をちよつと紹介してある。

⁷ピリポ答えて言う『二百デナリのパンありとも、人々すこしずつ受くるにな

お足らじ』

非常な群衆だから。「二百デナリ」は今でいうとどのくらいでしょうか。大体、1日の労賃、1日の食料が1デナリですから、二百日分です。ところが、相手は何千人というわけです。だから、二百デナリのパンをたとえ買ったとしてもダメだと。昔の計算でいうと大体、70円くらいです。昔といったって、戦後あたりの昔ですけれども、本当の昔ではない。

⁸弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言う『ここに一人の童子^{わらわ}

あり、大麦のパン五つと小さき肴^{さかな}二つとをもてり、然れど此の多くの人には

何にか^な為らん』



そういう「一人の童子が……」という言い方をしているのは多分、ヨハネ伝だけだと思います。マルコ伝を見ると、

「³²かくて人を避けて、舟にて寂しき処にゆく。³³その往くを見て、多くの人それと知り、その処を指して、町々より徒歩にてともに走り、彼等よりも先に往けり。」

先回りをしてしまっているわけですね。

³⁴イエス出でて、大なる群衆を見、その牧^かう者なき羊の如くなるをいたく憫^{あわれ}みて、多くの事を教えはじめ給う。」(マルコ6・32～34)

まず、話をされた。マタイ伝によると、

「病める者を癒し給う」

と書いてある。マタイ、マルコ、ルカのどれにも、「夕べになった」とか、「遅くなった」とか、「日が傾いた」とか書いてある。これは夕方のはなしです。まず、話をされたり、病める者を癒したりされたわけです。それは憐れんでこれを顧みた。

「³⁵時すでに晩^{おそ}くなりたれば、弟子たち御許に來りていう『ここは寂しき処、はや時も晩し。³⁶人々を去らしめ、周囲^{まわ}の里また村に往きて、己がために食物を買わせ給え』」(マルコ6・35～36)

といったようなことを弟子たちが言ったわけです。こんな寂れた所では食料がありませんから、みんなに行かせて食物を買わせてやってくださいと。マタイ、マルコ、ルカは大体、同じことが書いてある。

●五つのパンと二つの魚

ところが、イエスがそれに答えて、何と言われたかというところ、マタイ伝では、

「¹⁶イエス言い給う『かれら往くに及ばず、汝ら之に食物を与えよ』」

と。「汝ら之に食物を与えよ」と、マタイ、マルコ、ルカに、みんなそう書いてある。群衆に与えるような食物がありもしないのに、「与えよ」とイエスは言われる。無理なご注文です。すねというわけで、

「³⁷…弟子たち言う『われら往きて二百デナリのパンを買い、これに与えて食わすべきか』」

なんてことをマルコ伝では言っているが、イエスは、

³⁸イエス言い給う『パン幾つあるか、往きて見よ』彼ら見ていう『五つ、また魚二つあり』」

と。ここところは多少、言い方は違いますが、中身の上では同じようなことで、ヨハネ伝では、

「『ここに一人の童子^{わらべ}あり、大麦のパン五つと小さき肴^{さかな}二つとをもち、然れ



ど此の多くの人には何にか^な為らん』
と。マルコ伝は、

「³⁸…彼ら見ていう『五つ、また魚二つあり』」

と。「五つのパンと二つの魚」というのはどの記事もみんな同じです。

「¹³…弟子たち言う『我らに、ただ五つのパンと二つの魚とあるのみ、この多くの人のために、往きて買わねば他に食物なし』」

なんて、ルカ伝では書いてある。男だけでも五千人はいると。こういう情景なんですね。しかし、実に福音書の記事というのは簡単です。

¹⁰ イエス言いたもう『人々を坐せしめよ』その処に多くの草ありて人々坐せしが、その数おおよそ五千人なりき。¹¹ここにイエス、パンを取りて謝し、坐したる人々に分ちあたえ、また肴^{さかな}をも然^{しか}なして、その欲するほど与え給う。
¹²人々の飽きたるのち弟子たちに言いたもう『^{すた}廃るものなきように^さ擘きたる余^{あまり}をあつめよ』

と。「五つのパンと二つの魚」という。まず、一万人の人がいても、この時にみな全くこれは万事休すというわけです。ところが、イエスは、詩篇23篇のごとく、

「エホバはわが牧者なり。我乏しきことあらず」

と。とにかく、この聖書の言葉が、ただ言葉でありただ意味であるうちはダメなわけです。

●エホバはわが牧者

私はドイツ語の時間に学生たちに言いますように、新しいところはまず字引を引っ張って読みなさいと。単語はよく字引を引く。文法的なことは文法の本を読む。字引と文法の本は地図と磁石のごとくであると。新しい土地を歩くときには地図と磁石で自分で歩いてみる。それが散歩のおもしろいゆえんである。本もまたかくのごとしである。何でもかんでもこの本を教わろうと思って学校に來たのではダメだ。よく字引を引っ張って、一年間で引き破るほどに引く。我々の聖書ももうこれが二、三冊目というわけで読み破ってしまう。とにかく、そういうわけで、意味が分かったら、今度は繰り返し読んで読みなさい。読んでも、日本語に訳さない。直読直解。全部直ちに解する。私たちは日本語を他の言葉に訳して解りますか。日本語は直ちに直読直解しているわけです。あなた方は今、直聞直解しているわけだ。聞いて直ちにそれを解する。直読直解、直聞直解というようになくてはならない。会話もできないし、本も本当は読めない。そうすれば、身につきますよ。

ところが、この聖書というのは、この直読直解、直聞直解でもまだいかん。この「解」では。直読直食しなくてはいいかん。食べなくてはいいかん。直読直飲しなくては。直読直食という、読んで直ちに食べる。読んで直ちに飲む。これが本当の聖書の読み方である。それができないうちは、いくら研究会のなんのと、微にいり細に穿って、解りましたの解りませんの



と言ったって、それは手前の話だ。どうぞ、皆さんは、預言者たちや使徒たちが本当に神・キリストの言葉を、福音の言葉を受けて、直ちにその身体に魂の肉とした。それをやらなかったならば、何年、教会に通うがどうにもならん。事実が証明する。魂の世界はごまかしがきかないですから、本当のことが行われていなければ、その人に生命が来ないことはもう明らかである。ところが、イエスはそれを完全にやっていたひとです。

「エホバはわが牧者なり。われ乏しきことなし」

と。自分は羔である。神の導きのまにまに、風のまにまに動かされている小舟のごとしと。神の導くまにまに動いていたのがイエスというひと。自分を全託している。全託した祈りの世界。そうすると上から何という言葉が来ているかというひと、

「我なんじを悦ぶ」

と。讃美歌に、「主われを愛す」というのがあるね。あの讃美歌は幼稚園の日曜学校で一番先に教わるのだから、これは最高の讃美歌です。これは始めにして終りです。讃美歌の中に、「われ主を愛せん」というのがあるが、こちらから「愛せん」という讃美歌よりも、「主われを愛す」というこの讃美歌の方が元です。これは本願の讃美歌なんです。本願の大慈大悲の讃美歌です。

ヨハネというひととはそういう人です。ヨハネというひととは他の使徒たちとどこが違うかというひと、神に愛せられたひとである。「その胸に寄り添っていた」という。これはキリストに愛せられた。

「心を尽くし精神を尽くし思いを尽くして父なる汝の神を愛すべし。隣人を愛すべし」

とキリストは言いました。あの言葉はもちろん大事なんだけれども、ヨハネの書簡を見ても、「私たちが神さまを愛したのではない。神さまが先に愛したんだ」

と。「神の我を愛し給うごとく」と、これはヨハネ伝にキリストの言葉として出ている。

とにかく、キリストというひととは完全に自分を委ねまして、神さまの本願の愛に動いていたひと。「信仰によって動く」なんて言うよりも、愛によって動く。恵みが先にある。

「恵みにより信仰によりて」

という。恵の方が大事なんです。この恵を全身でハタたと受けとるのを信という。身は信に通ずると言った方がいい。身体を投ずることが信仰である。もうそうになったら、あなた方、「祈れません」もへったくれもない。何も言わなくていい。自分を沈黙をもつて任せる。それが最高の祈りです。

●われ乏しきことなし

社会問題で、どれだけなかったならば不足するのどうのと、経済問題、政治問題は大いにやってください。日本は政治問題で非常に欠陥だらけのものがあるようですが、それは



大いにやってください。いつも争いは賃金の問題で、不平不満、足りなり足りないと言うところ、詩篇では、

「われ乏しきことなし」

という。何もないくせに、「乏しきことなし」と。「二つの魚と五つのパン」に対して、雲霞うんかのごとく相手がいる。しかも、「与えよ」と言う。買いに行つたつて、ことは始まらない。「それでたくさんだ」と。私たちの日常生活もこの気合を呑み込んでいったら、「俸給を上げろ。ベースアップのなんの」なんていう問題はもうどうでもいいことになってしまう。まずそれから展開するところの事態です。

聖書に書いてあるキリストのいわゆる奇蹟の中でこれほどのものはちよつとほかに考えられない。これは誰でも頭で考えたらどうにもなりませんよ。病や癩病人を癒す、それはキリストはやるでしょうと思うかもしれない。けれども、二つの魚と五つのパンで五千人に食わせて、みんなが飽き足りて、なお余つたという。一体これは何事か。これはもう匙を投げてしまう。ブルトマンなんていう学者も、そのところはどうにもならん。

「足るを知る」という言葉がありますね。足るを知ることが大事だと。

「わが恵み汝に足れり」

という。足るを知る。

ディオゲネスなんていうやつは「何も要らん」と言つて、樽の中に住んでいた。アレキサンダー大王が来て、

「何か欲しいものがあつたら、何でもやる」

と言つたら、

「私は今、日向ぼっこをしているのに、あんたがそこに立っていたら、日が陰つて

しまつて邪魔だよ。私が欲しいのは日光だ」

と言つた。そういう気合が非常に大事です。あの話を読んで、ただ笑つていたのではしょうがない。なにもディオゲネスの真似をする必要はないけれども、ストア派の哲学のひとつの実践として、そのような極限にまで行っているところの、いわゆる無一物無尽蔵的な生き方です。

「要るのは太陽の光である」

という。そこにひとつの感激を覚えなくてはいかん。人生は感激を失つたらダメですよ。今の若い人たちがそういう真理に本当に感激しなくてはいかん。

●天を仰ぎて祝し

「天を仰ぎて祝し」

という言葉がマタイ、マルコ、ルカに書いてあつて、ヨハネにはただ「謝して」と書いてあります。こここのところはヨハネの書き方がちよつと弱かつた。「天を仰ぎて祝し」とは、



「上をじつと見る。天の中へと仰ぎみる」ということ。

私が作詞した獨協大学の校歌に、「天の原ふりさけ見つつ」と私は書いたけれども、あの気合なんです。しかし、あの宗教的な本当の内容は誰もつかめない。つかんでくれない。まあしょうがない。本当に天の原ふりさけ見て、この大自然に充滿しているところの浩然の気を胸にして、日輪を胸に宿すような魂となるならば、その学生なんてのは凄いことになるはずなんだけれども。校歌はだいいちなかなか歌わないし、歌っても真意がわからない。もういい加減で大学をやめようかな(笑)。私はいつでも本当に辞めますよ。

五つのパンと二つ魚をとって、天を仰ぎ見た。ふりさけ見た。天を裂くほどの見方をしなければ本当の見方ではない。イザヤ書64章を見てください。そういう言葉があるから。あなた方は、イザヤ書は時々開いて朗々と読むといい。文語でなければダメだよ。

「願くはなんじ天を裂てくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動かん」とを。」(イザヤ64・1)

と書いてある。63章15節にも、

「¹⁵ねがわくは天より俯視^{ふしぞ}なわし、その栄光あるきよき居所^{すみか}より見たまえ。」(イザヤ63・15)

とある。「願くはなんじ天を裂てくだり給え」という64章。イエスがヨルダンで洗礼のヨハネから洗礼を受けられたときに、

「天裂けて、御靈^{みたま}鳩の如く降り^{くだ}り」

と書いてある。私がなぜ、私の神学の性格に「突破」ということを言うかというと、裂けること、爆発です。爆発して壊すのではない。爆発してももの凄いものがそこに展開して、今度は全体を大きく包摂する。そういうようなのがこの聖書の世界なんです。だから、天を仰ぎ見、貫き見るような眼でもって見て、キリストは何をしたかという、今度は、「パンを裂きて」と書いてある。これは聖霊を分与するところの、パンを裂く行動なんです。パンが一つであろうと二つであろうと、そんなことはどうでもいい。これを裂いて与える。

●キリストはパンにおいて己を裂いた

私は物理の世界はよく知りませんが、原子の核分裂はもの凄く爆発して、連鎖反応が何かしらなが、もの凄い展開をする。イエスのこの行為は、ただパンを裂いたのではない。その前にある「天を仰ぎ祝して」という、キリストが「天を仰ぎみて」というときは、キリストは完全に神の中に自分が入って、神の驚くべきエネルギーを受けとっている。創造のエネルギーをいただいているわけです。万象を創造するところのこの神のエネルギーの中に自分が入って、もう彼自身が原始力となってしまう。彼自身が生命の原始力となった。「ウルクラフト」、原始の力です。彼自身が即ち芥子種一粒となる。パンを裂



いたのは己を裂いたのと同じことです。ただパンを裂いたのではない。キリストはそこに
おいて己を裂いた。

あのカナの婚宴で水を葡萄酒に変えた。彼自身が即ち聖霊の水を宿しているひとです。
それがこの祈りの世界で葡萄酒に変わる。何といったって、それはどんな人間もできない
業です。ところが、イエスは普通の当たり前の人であった。普通の人であり、我々と同じ
弱き人の姿を持った。ヘブル書やローマ書にも書いてあるとおり。ところが、その内容は
完全に霊的生命であった。それでありますので、パンを裂いて与えたらば、それが無限に
展開をした。

ある自然界の生命のことを書いた本の中に「デシオン」というものがある。「デシオンは
400億分の1に希釈したところの液、即ち、1グラムを4千万リットルの水に溶解したもの
でも酵母菌の性質を促進する力を持っている」とか書いてある。そういうデシオンとかい
うものは量子の1とか量子の3とかいうやつと協力するんだそうですけれども。そういう
自然の生命の世界でも、驚くべき力を持ったやつがある。いわんや、キリストの持ってい
る霊的な霊子という、霊的な原子は、パンをそのようにもの凄く連鎖的に創造する力を持
っているらしい。

●霊現の世界に魂が入ったら

今日、10月15日というのは、私はちよつと忘れられない日です。我々の無教会時代の先
輩に植木洋介という人がある。この人は無教会の中でもちよつと変わり種で、塚本先生のお
弟子さんでしたけれども、胸の病気で仆れてしまった。中秋の名月、10月15日に亡くなっ
た人です。奥さんも弱い人でした。両方とも胸が弱い。結婚しようと思つても、身体が弱
くて15年間待った。それで結婚して、3年か4、5年で仆れてしまった。昔は今のよう
な薬がなかったものですから。その人は、しかしながら、実に当時の無教会としては少し桁
のちがった魂であった。

「聖書の記事は明白であつて説明せざることを許さない。全然虚構として捨て去るか、
全然真実として公認するかの他はない。

なかなかはっきりしたもの言い方をします。

奇蹟を否定するのは現代キリスト教全体の傾向であつて、今日敢えてこれを信ぜんと
するには大勢の笑いものとなる覚悟を要する。彼らは、奇蹟は非現代的であり現代科
学に一致しないと云つて、これを退ける。しかし、奇蹟なしの合理的キリスト教を信
じようとするのは、水に入らずして水泳をしようとするようなものである。量水泳と
いうよりほかはない。」

なんてなことを書いてある文句があつたので、ちよつと紹介しました。「植木文集」とい
う二巻ですが、実にコンデンスされた文章です。



まさに我々が今、今日ぶつかるところのこの現実はどうてい我々の常識も、現代的な科学的な意識も、どうにもならん。けれども今は、科学の世界でも実に不可思議と思われることがだんだん証明されてきているような驚くべき世界です。ただ、この霊的な世界がいかにもお留守になつてしまっているものだから、ただ笑うけれども。

「それは科学的意識の越境である」
とヒルティが言っている。

「神を信ずる」というのは、自分の一切の判断を乗り越えて、もうひとつ違った次元に入ることです。自分がこつち側の三次元的な所にいて「信ずる」なんていうのは、そんなものは信仰ではない。「信ずる」とは、高次元の絶対次元の世界に自分を入れることなんです。

「私を受けとった者は死んでも死なないぞ」

「はい」

と。その「はい」は絶対次元の中に自分を入れてしまっているはなしです。

「それは、キリストが言ったから仕方がない、そうかも知れない」

なんていうのは信仰でも何でもない。ところが、

「そうかも知れない。まあそうしておこう」

なんていうような信仰がたくさんあるわけだ。それをいい加減にごまかして、聖書をただ勿体ぶっているだけだ。勿体ぶったつてダメです、聖書なんていうのは。聖書は勿体ぶるものではない。これは食わなくては。食べて、絶対次元の生命の世界に、その中に自分を本当に入れてしまう。これを「信」という。もう何とも言えない。いや実にこれを「現」と言う。もう「信」なんて言わなくていい。入れてみたら、それが現実の世界であつたと。我々の相対的な現実がどんなにそれに食い違おうが、そんなことはもはや頓着しない。そういう現の世界に、霊現の世界に、霊的な現の世界に、あなた方の魂がウワツと入ったら、もうそれは生き方が違ってくる。ウソか本当か、自分で体験してみたらいい。

キリストは本当に信を現とした。この次のヨハネ伝に出てくる。

「神の業は何か。信ずるこれなり」

と。神的な業とは神を受けとることこれなりと。どうして、そんな受けとり方ができるのか。自分を、あるがままの自分を投げ出すと、神さまの方では、「待つてました」とばかりに受けとるわけです。神さまは、取り澄ました者は待つてない。大いに聖書を研究してかかったり、そんなことはいい。待つてない。いつでもいい。速攻でもいい。直接、あるがままの自分を投げ出してかかつてくる人を待つている。私は聖書の時間やゼミナールの時間に、

「ああ、あなた方は惜しいな。もうひとつ中に入りなさい。よかったら、いつでも

集会に飛び込んで来なさい」

と言うが、なかなか飛び込んでこない。そういう現の世界の中に、あるがままの自分を投げ出す人、その人はぐんぐんと本当の展開を始める。



キリストは投げ出したから、神さまに

「われ汝を悦ぶ。汝はわが愛しむ子である」

と言われた。即ち、神の愛が、霊的な力強い愛が——愛は力を持っています。力のない愛なんてものは本当の愛ではない——そういう力強い、命づけるところの愛がかかってくる。十字架は私たちを、このしょうがない我というものに執着するところの、自分ではどうにもならない我という、我^がというやつをぶっ飛ばしたのが、これが十字架の贖いという。

「解放して、さあそこにもう凄い力を、生命を与えるぞ」

というのがこの聖霊の愛です。だから、

「十字架と聖霊は絶対に離すことができない」

と、申し上げている通りです。これがキリストの本願である。

●現象体においてその根元なるものを見る

「己を裂いて皆に与える」というのは、

「この牧^かうものなき羊のごときものを憐れんで」

と書いてある。このキリストの憐れみがかかってくるまで、

「さあ、みんなにこの私の生命を与えるぞ」

と。ところが、皆はパンをいだいて、

「ああ素晴らしいな、何だかしらないけれども、パンがたくさんきてしまった。お

魚は食べられるし」

と。それで飽き足りてしまって、まだ余ったものがたくさんある。

「それを粗末にするな」

とキリストは言っている。

¹³すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの擘きたるを食いしもの余、十二
の筐^かに満ちたり。

イエスはそういうようにして与えましたが、彼らは

「さあ、パンをもらった、お魚をもらった」

でもって喜んでしまった。せつかく、大きな恵みがきているのに、実はこの驚くべき奇蹟、徴を本当に受けとらないで、ただ御利益的にこの徴を受けとっている。

¹⁴人々その為し給いし徴を見ていう『¹³実にこれは世に来るべき預言者なり』

「人々その為し給いし徴を見て」なんて言っても、これは本当に見てないんだ。そのことはあとの方にくるとすぐわかる。御利益的に受けとるから——まあ御利益宗教ならそれでいいでしょう。「商売繁盛、家内安全」とか、いろいろある——キリストはもちろんその現象面では、御利益的なことでもいくらでも現していますけれども、キリストは御利益として与えているのではない。キリストのなさっていらつしやるところの言葉も現象もみな焦点



を持っている。キリストの言葉も、いろいろないわゆる奇蹟といわれるような現象も——奇蹟といっても摩訶不思議ではない——あれはみんなちゃんと法則が働いている。我々の端倪^{たんげい}すべからざる法則が働いている。これはみんな焦点を持っている。この焦点を忘れて、現象にとらわれているから、みんな本当の信仰に入らないわけです。焦点は何かというと、キリストに表れているところの神の生命なんです。神の生命の質は何かというと、愛です。神さまは何かというと、霊的な何ものかです。この霊的生命、霊的な愛というもの。それを光と言おうが、何と言おうがいい。

その現象において、

「ああ、菊は素晴らしいなあ。コスモスは素晴らしいなあ」

と。コスモスを見て、宇宙を見る人は本当にコスモスを見ている人です。驚くべき宇宙を、太陽の光を、その原子力を——太陽は常に核分裂やなんかをやっている——その驚くべき事態を花において見ている人は、これが本当にコスモスを見ている。菊を見ても同じことです。それらの異なった香りと姿と色合いと、それを喜んでいる。しかしながら、いかにそのコスモスはコスモスにおいて、菊は菊において、その特殊性において、ある驚くべき天的なものが、根元的なものが現われているか。その根元をその特殊において見ない人は、特殊を見ているのでもなければ、根元を見ているのでもない。

また、ただ「根元、根元」と言つて、根元ばかりを見ても、それは混沌としている。それは観念に行つてしまう。我々人間は、一人びとりは現象体なんだから。A君はA君という天下一品の現象体なんだ。その現象体において根元なるものが現れているかどうか。現すかどうか。それだけが問題である。私たちの存在の問題と使命はそこにある。それを体現するようになったらもう、人生の目的は既に到達している。いつ死んでもいいですよ。未完成の完成というのが来ているんだから。未完成の完成です。

あのシューベルトの「未完成交響楽」というのを聞いていると、本当にあれは未完成だね。しかし、何だかしらないけれども、あとからグーツと余韻が響くような気持がする。やはり、本当の音楽だと思う。我々は未完成交響楽を自ら現象している。そうしたら、本当の落ち着きと本当の底力が出てくる。やはり、普通教育ではそういった消息は出てこない。絶対にこの宗教の世界に入らなければ。

「そう言われたつて困りますよ。そんな高い次元になかなか入りません」

なんて。そんなことはない。今即刻、直ちに入れる。あるがままの自分を投げることで即ち次元の中に入るということ。解るのではないのだから、受けとつてしまえばいい。直ちに。

「はい、そうです。こんな驚くべきことが現象したんです。なんと我々の世界とは

桁違いなところでしょうか。もうこの記事がうれしくてしょうがない」

と。こうなったら、キリストの最大の奇蹟と言われるところの事態が、逆に私たちの力となる。何となれば、裂いて与えたのはパンではなかった。キリストの限りなき生命であつた。



このキリストの生命をいただければ――パンをいただこうが、いただかなろうが、お魚を食べようが、食べなかりうが――もう満ちてしまう。皆さんは、この記事を今日読んだら、「もうお昼のご飯はいりません。私はもうお腹がいっぱいで飽き足りました」と。そういう魂の状況に入ったら、もうそれは本当にこの午前の集会を本当に受けとっているというものであります。

●神さまの不思議な導き

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば生まれぬさきの父ぞ恋しき」

これは時々私が引用する白隠和尚の歌です。こういう境地に耳を澄まさなければ。自分を本当に入れたらば、こういうことが聞こえてくるという境地ですよね。「闇の夜に鳴かぬ鳥」という。真つ暗です。鳥も真つ黒です。その鳥が鳴かない。「鳴かぬ鳥の声聞けば生まれぬさきの」、自分が生まれぬさきの、「父ぞ恋しき」という。そういう、音以前の世界に自分を投げ入れて、霊の耳をもつてその音を聞くような、自分の投げ込みの――「天をふりさけ見る」という――そのようなところになると、本当に父が恋しいと。「生まれぬ先の父ぞ恋しき」という。

「自分が生まれないさきから神さまに選ばれていました」

と、預言者エレミヤが言いました。パウロも言いました。この虫けらみたいな私がどうしてこのように福音を受けとらされるようになったか、私は時々瞑想すれば、もう涙も涙とまらないような、神さまの恵みにおそわれます。もう他の何ものをもつてしてもこれに代えることができないと。これが、「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば」という心境と同じです。

皆さんは自分を省みて、かくも不思議な導きをもつて自分は神さまの福音の中に捕らえられてきた。神の驚くべき歴史の中に、そして、やがて来るべき新天新地の一員となるべく捕らえられてきた。その神はまさにイエス・キリストにおいて私たちに最もじかじかに最も親しく自らを現している。このキリストに平伏し、このキリストの中に自分を投ずることになったらば、

「もういいです。本当に終末的な世界を現実としました」

ということでもあります。取り澄まして、キリスト教の、聖書研究のなんのこのというのは、ちゃんちやらおかしいよね。

「聞かせばや篠田の森の古寺の小夜更け方の雪の響きよ」

(聞かせばや篠田の森の小夜更けて轟き落つる松えだの雪)

雪は響きもなく降るものです。しかしながら、その雪の降る音を聞かせてやりたい。なんと素晴らしい静かな味のある音かなと。音なき音を聞く人です。そういった、神との深い交わりの世界。仏教の世界でも、そういう意味においては、みんな本当の意味における神秘の世界です。神秘と言っても、ただ摩訶不思議という意味ではない。「ミ



ステリオン」、奥義の世界です。「とにかく、何か知らんけれども」という。

「山居せば吉野の奥のそれよりも隻手せきしゅの声や深き隠れ家」

「隻手の声」というのは――拍手をするときに、両手でやらない――片手でもってその音が聞こえるかという。祈るときもこういう(片手の)祈りです。東でも西でも祈るときには、アンテナみたいの手を上に挙げる。霊界に通ずるわけです。そういう隻手の音。そういうところに本当に自分を隠して、その中に自分を投身する。そうすると、この宇宙の支配しているところの、仏において現象しているところの、神においてキリストにおいて現象しているところの、驚くべき霊的な消息の世界です。

なかなか日本の坊さんたちは偉いですよ。白隠和尚の先生に正受上人というのがある。そののまた先生に至道無難禅師というのがある。

「わが法は柳の糸の乱れ髪結うに結われず解くに解かれず」

(わが恋は柳の糸の乱れ髪とくとかれずいふもいはれず)

なかなか洒落た歌だ。「結うに結われず」というのは、「結う」を「言う」にかけてある。「解く」というのは、「髪を解く」というのと「中身を解く」というのをかけてある。「わが法は柳の糸の乱れ髪」の如くであるという。実は、解くに解かれず言うに言われないところの驚くべき妙法であるということなんです。この妙法が受けとれるかと。私たちがこのキリストの中に入れば、ヨハネ的に本当に妙法の世界に入る。

●霊子とでも言いたいような生命の世界

何と言ってもその点で、

「ヨハネはキリストの胸に寄り添っていた」

と言われるくらいな――魂が寄り添っているんですよ――そういう愛せられた弟子であつた。仏さんの世界でも、阿南は釈尊に愛された弟子であつた。愛された弟子ということが大事だ。釈尊を愛したのではなくて。この阿南とヨハネが似ているというようなことを言いますが、まさに自然だと思います。

ヨハネ、阿南のごとく、あなた方一人びとりが神さまに熱愛の器となる。「器となる」と言っても、なにも自分を善くするということではない。神さまに、キリストに投げ出せば、それぞれあるひとつの角度から特愛の器となっていく。なんとまあ、キリストのこの力強い愛は、深い愛は、何をもってこれを自分は代えることができるかと。パウロもそのことを感じました。パウロは直弟子ではなかった。次のまた弟子みたいなやつだったけれども。ローマ書の8章で、

「このキリストの愛から私たちが何が離すことができるか」

と言って、彼はキリストの愛に本当に自分をぶちまけて祈っているから、あのような叫びが出てきたわけです。



キリストの己を裂いてまで私たちに生命を与え――パンではなかった――パンにおいて現われているところのキリストの生命を食べないで、その人たちがただパンを食べて、

「ああ、お腹がいっぱいだ。これはありがたい」

なんてでは、これは御利益宗教です。同じ現象が起きても、それをどう受けとるかでまるっきり性格が違ってしまふ。もし、いわゆる教祖的な人間が御利益を売り物にしているようなことだったら、それは本ものではない。必ずダメになつていく。

「イエスの糧」とは実にイエス自身であつた。愛の言うに言われざるころの妙法が働いている事態であつた。そういうことをこのマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネにおいて報道されているところの、驚くべき最大の奇蹟と思われるような事態において言えるわけです。

私は今の原子物理学というのをもっと学びたいと思うので、専門家に少しやさしく話してもらいたい。私はそういうことを聞くことが大好きなんだ。しかし、読んでみたけれども、難しくてなかなか解らない。けれども、面白いことが書いてあつたね。とにかく、そういう物理の世界と聖霊の世界がどういふような関連なのか、これはまだ神秘であろうと思いますが。宇宙のことを少し読んでみると、まあ実に雄大な世界であることか。地球上のこととは全く馬鹿げたことに思える。原子の構造は非常に空間を持つているんだね。原子核と周りを回っている電子の距離はものすごくあつて、そういう非常に空間的なものが数えきれないほど集まつて、人間の身体でも何でも出来ているらしい。生命的なものとういふ物とはどう違ふのかとういふことを、非常にはつきりと書いた本にまだぶつからないんだけれども。そういう本を見たいと思う。しかし、宇宙線なんていうやつが私たちの身体をしよつちゅう貫通していて、一秒間に百位い穴を開けているそうだけれども。

とにかく、そういうたある物理的なもの凄い力が働いている。そこに私たちはもつとそれよりも凄い霊的な力が、生命がそれを支配していることができているという、キリストにおいてそれを見るわけです。この次に出てくるころの湖上を歩くころの現象にしたつてそうですね。そうなつてくると、いよいよ私たちの霊が、霊を中心としたところの我々というものが、キリストの中に発現していく。もうこれは絶対に祈りです。祈りの世界でその中に自分を入れて、これは全く「言うに言われず解くに解かれず」という法則の世界に自分が入つてしまふ。そして、何とも言えない絶対次元の生命の、光の生命の中に自分を活かしていく。かくしてこそ、本当の知恵も出てくるし、本当の行爲も出てくるし、一切の私たちのいわゆる文化的活動の根元である。よく、宗教を他の文化現象と並べて、宗教現象なんてことを考える人がしばしばありますけれども。絶対にそうではない。もうひとつ奥の世界ですから。そういうことを私はいよいよ思ひざるをえない。

天然の放射性の原子以上の、霊的放射能を持ったところの霊的原子、霊子とでも言いたいような、生命の世界を聖書は実証しているわけです。信仰とはそのような生命を本当に身につけることであるということはいよいよ受けとつていただきたいと思ひます。

